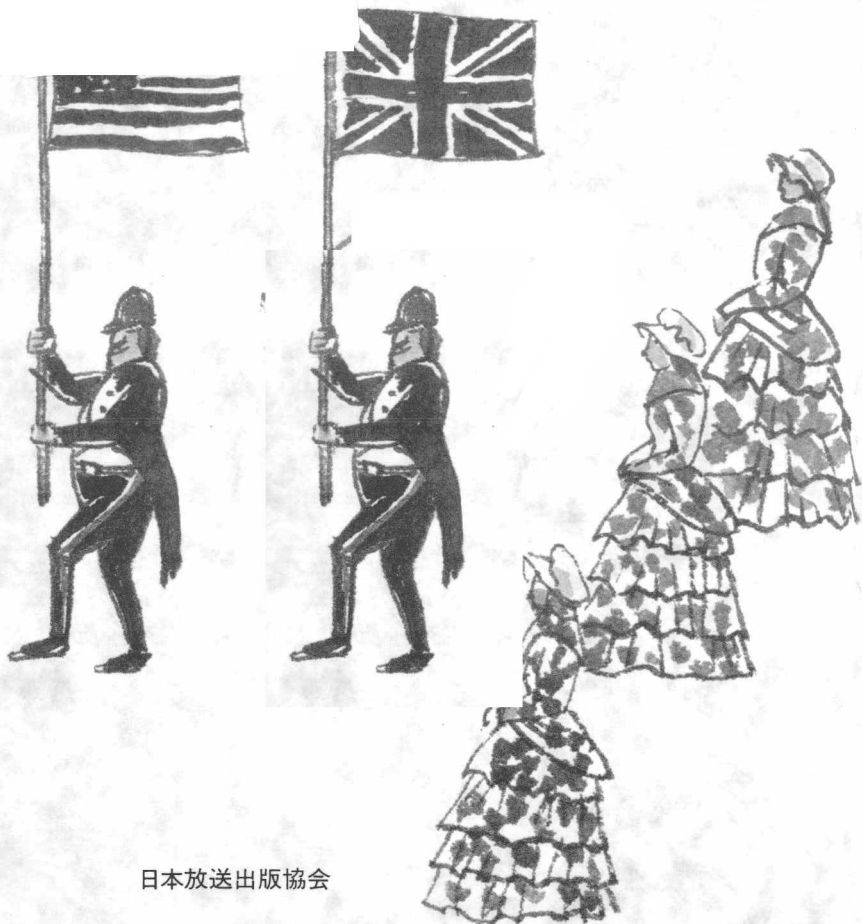


ハイカラ さん 大藪郁子



ハイカラ さん 大藪郁子



ハイカラさん

定価一、〇〇〇円

昭和五十七年四月十日 第一刷発行

著者 大藪 郁子

発行者 藤根井和夫

印刷 榑亭有堂

製本 榑石津製本

発行所 日本放送出版協会

郵便番号一五〇

東京都渋谷区宇田川町四一

一 振替 東京一四九七〇一

(落丁本・乱丁本はお取り替えます)

検印廃止

© 1982 Ikuko Oyabu

Printed in Japan

ISBN4-14-005105-1 C 0093 ¥1000E

ハイカラさん・目次

第一章 ハイカラ娘の夢の巻 5

第二章 ホテル作り準備の巻 70

第三章 桐原ホテル開業の巻 132

第四章 夢は世界への巻 189

カバ・扉
装幀 安野光雅
土方弘克

ハイカラさん

第一章 ハイカラ娘の夢の巻

一

明治十五年十二月。

サンフランシスコから横浜を目指して、太平洋を航行するフランスの貨物船ル・モンド号があった。

その船室に三人の日本女性が乗っていた。

山川捨松二十歳、津田梅子十七歳、野沢文十八歳。

山川捨松と津田梅子は、明治四年、政府留学生として、岩倉使節団とともに渡米した女子留学生五名のうちの二人である。

そのとき、最年少の梅子はまだ満七歳たらず。

彼女たちはアメリカ人の家庭に預けられて、勉強し、十一年ぶりに母国へ帰るところである。

他の三人の女子留学生たちは、年長者の二人は一年で、もう一人もすでに前年帰国し、彼女たち

が一番おそくまで残っていたのである。

山川捨松と津田梅子が上級士族の娘で、政府留学生であつたのに較べると、野沢文の場合はちよつと立場が違つていた。

野沢文は横浜の石炭油（石油）卸問屋の娘で、高等小学校を卒業後、布恵利須英和塾に通い、そのミッシェンの先生が帰国するとき、シカゴ市の外国人留学生奨学資金を受けるべく手配してくれ、運よく書類選考にパスしたのだ。

奨学金は二年間だけであつたが、二年間、文はシカゴ郊外のミシガン湖のほとりにある、エバンストンという美しい保養地で、ミス・メリー・パイダーの家の下宿し、近くのハイスクールに通つた。

なにしろ二年間という短期間なので、英語に慣れるのが精いっぱいといったところだつた。

が、津田梅子に言わせると、

「あたしたちは親に言われて、何もわからないまま渡米したけど、あなたはご自分の意志で行つたのだから、立派だわ」

ということだつた。

同じ船室で二十日近くも一緒に寝起きするうち、三人はすぐ親しくなつた。

捨松や梅子にとっては、幼いころ離れたまま、十一年ぶりに帰国する母国がどう変わっているのか、いま浦島のような気持である。

二人は文から横浜の文明開化のもようなど聞き、おどろいたり、なつかしんだりした。

三人はまた帰国後の夢や理想も、よく語り合った。

「私は政府留学生だけど、今の政府には不満よ。薩摩と長州ばかりがのさばって」

そう語るのには、派手な顔だちをした山川捨松である。

彼女の家は会津藩の家老で、維新戦争で会津若松城が落城したとき、彼女も子供ながら城に籠って、弾運びをしたり、負傷者の手当てをしたという。

「白虎隊の仇を打つの、政治の世界で」

そう言いながら、きりりと白い鉢巻きをしめると、いかにもよく似合った。

「女政治家になるの?! 捨松さん」

文はおどろいて目を丸くした。

津田梅子は、「女子教育のために尽くして、お国にお返しをしたいの」と言う。

梅子はその言葉どおり、船室でも勉強に余念がなかった。

漢字の書き取りなど、夜おそくまでせつせとして、

「夜の夜中まで、またお勉強、感心のきわみですねーえ」

と、捨松にからかわれていた。

「文さんの理想は何？」

捨松にそうきかれて、文は困った。

彼女たちのようにはっきりした目標があるわけではなかった。

「ん……あたしは、たった二年外国人向けの学校に通っただけですものね。せめて、看護婦のライ

センスがとりたかったんだけど」

文が下宿していた家のメリーさんは、看護婦だったのだ。文も職業教育として、三カ月は看護婦コースを受けたが、ライセンスをとるにはいたらなかった。

「ライセンスはなくても、やる気があれば何か出来ます」

梅子はさすが教育者を目指すだけあって、今からもうその風格があった。

梅子にきめつけるように言われて、文もあわてて言った。

「やるつもりよ。メリーさんにお返しがしたいの。ほんとうに親切にしてもらったんですもの」

「お返して、どういうふうに？」

「どういうふうになって、嫌だわ、幼稚な夢だもの。笑われっちまう」

「笑わないことよ。教えて」

捨松も興味ありげにからだを乗り出す。

「ほんとに笑わないでね」

文は念を押してから話した。

「あのね、あたしの家は横浜で外国人が多いでしょ。メリーさんのように、外国人を泊めて、お世話がしたいの。外国と日本をつなぐ小さな橋になりたいの」

要するに、外国人相手の下宿屋なのだ。

しかしそれはあくまで希望で、実現出来る可能性があるとは思えなかった。

アメリカの寄宿先で親切にされたのは、梅子や捨松も同様だった。

梅子はランメン家、捨松はベーコン家に預けられていたが、ともに教養のある中流階級で、その後もずっと付き合いが続くのである。

二人は文の夢を笑わなかった。それどころか、東西のかけ橋になる夢を、パイオニア精神でぜひ実現させるべきだと強調した。

三人はそれぞれ自分たちの夢を実現させることを、誓い合った。

文は誓いながらふと、帰国したら早速待ちかまえているであろう許婚いんかけとの結婚を思っ、心を暗くした。

十二月三十日、深夜。

日本を目の前にして、ル・モンド号は激しい竜巻きにおそわれた。

文たちの十二号船室も大揺れに揺れて、水さしやコップがひっくり返った。

こういうとき一番さわぐのは、ふだんは強がりを言っている一番年長の捨松である。

「フミ、ホワット・ア・ヘル（怖い！）」

捨松は文にしがみついた。

文とて怖さは同じである。生きた心地もしなかった。捨松と抱き合っ、思わず、

「お母さんっ」

と、悲鳴をあげていた。

梅子は比較的冷静で、両掌を胸のところで合わせて、英語でお祈りを唱えていた。

「助けてえ！ 神様、あたし、死にたくない！」

取り乱している捨松を見ると、文は自分がしっかりしなければと、懸命に気を取り直した。

捨松は突然口を押さえて、よろけながらドアのほうへ向かった。

文はすぐ部屋の隅からブリキ製の屑籠を取り、新聞を突っ込んで差し出したが、捨松は吐こうにも吐けず、苦しそうにあえぐ。

「そうだが、こういうときのために、メリーおばさんから船酔いのお薬をもらったんだわ」

文はあわててバッグの中をかきまわしたが、船酔いの薬も他のたぐさんの薬と一緒に、船積み荷物にして送ったらしく、見つからなかった。

医務室でもらって来るより仕方がない。

「失敗、失敗」

と首をすくめながら、文は船室をとび出した。

さいわい、船の揺れはほとんどおさまっていた。

医務室へ行って薬のことを頼んだが、フランス人の船医は、嵐はおさまったから、早くベッドへ行って寝ろ、というように手を振った。

フランス語のわからない文は、英語と手まねで大奮闘して船酔いの薬だと説明したが、船医はおそかに「ノン」と首を振るばかりである。

薬をもらうのをあきらめて船室へ帰る途中、文はどうやら船の中で迷子になったらしかった。

何しろ細い急な階段や廊下が、やたらにあるのだ。

もともと貨物船だから、乗客も多くない。

船員たちも嵐が静まったのでほっとして船室へ帰ったのか、誰にも会わない。

文は方角もわからなくなつて、手探りでうす暗い階段をおりていると、下のほうでランプの灯がちらちら動いているのが見えた。

船員がいるらしい。

文はほっとして、その灯のほうへおりて行くと、そこは船倉で荷がたくさんつまっていた。

「誰かいませんか？ ホヤー・イズ・ザ・キャビン？」

文は大きな声で呼びながら、荷物の間を歩いて行くと、突然、荷物のすき間から何かが頭を出し、

「モーウ」

と、鳴いた。

黒と白のまだらの大きな牛だった。

こんなところで牛に出会うとは思っていなかった文は、

「タ、タ、助けて」

這いながら荷物の間を抜け、壁ぞいの少し広いところに出ると、そこにもまた牛がいて、「モーウ」と全身をあらわす。

文は荷物にすがりついてあとずさりしながら、つまずいて転んだ。

そのとき、荷物の奥のほうから、誰かが、

「メリー、メリー」

と呼びながら、こちらへ近づいて来た。

カンテラを下げたボーイラーマンらしい男で、彼は牛に近づくと、牛の背をやさしく叩いて話しかけた。

「メリー、こんなところへ出て来たって、野原には行けんぜよ。もう一日で横浜に着くんじゃきに辛棒せいや」

メリーというのは何と牛のことだったのだ。

が、それよりおどろいたのは、彼が日本語をしゃべったことだった。

「船員さん、日本人ですか」

荷物のかげに転がっていた文は、あわてて起き上がった。

煤けた顔をしているが、たしかに日本人だった。

男は桐原次郎太だが、次郎太のほうもおどろいて奇声をあげた。

「こら、びっくりじゃあ！」

「私こそびっくりしましたよ、牛がこんなところに」

文も負けていない。

「さっきの大揺れで、檻の棧が開いたんですろう。船室のほうに日本の若い婦人が三人乗っちゃられるとは聞いとりましたが、船底を散歩ですかい」

次郎太は高知弁でからかうように文を見た。

「こんな真夜中に散歩だなんて、私、そんな陽気者じゃありません。お友だちが気分が悪くなったから、お薬もらいに行っただけですけれど、ドクターはノン、ノンって、お薬下さらないんです」

それから文は、牛のことをきいた。

「それ、日本に輸出される牛なんですか」

「輸出ちゅうより、輸入じゃろうなあ、わしが連れてもどるんじゃないに」

「まあ、あなたの牛なんですか」

次郎太はテキサスの農園で働いていたのだ。

「牛を買うた方もスカンピンで、ボーラーの石炭運びしてタダ乗^{ただのり}りさせてもらうちよるんです。このメリーの乳も船の食堂で使うてもろて。牛ともどもに薩摩守忠度^{ただのり}じゃ」

という、文たちが毎朝のんでいたミルクも、メリーさんの乳だったわけだ。

「メリーメリーって、妙な気がしますわ」

文は言った。

「牛じゃって、名前があってもよからうがね」

「メリーさんって、私の大恩人の名前なんですもの」

「そら、失敬しましたあ」

次郎太はベコリと頭をさげた。

飾らない好感の持てる青年で、文も思わず笑った。

「たのしい偶然ですわ。日本に帰ったら、早速メリーおばさんに手紙を書きます。大嵐のおかげ

で、船の底でメリーさんに出会いましたって」

「さっきの竜巻きで、あんたもわしもメリーも、一緒に海の藻屑と消える運命じゃったかも知れんぜよ。ハハハ、お互い、助かってよかったですのう」

「ほんとに」

文はもっと話したかったが、こんなところで時間をつぶしていると、梅子や捨松が心配するだろう。

十二号室への道を教えてもらって帰ろうとすると、次郎太が呼びとめた。

「あ、ちょっと」

「何でしょうか」

「足許、照らして行かんかい。私有物じゃきにあげますわ」

次郎太は手にしていたカンテラを差し出した。

「でもカンテラがなくちゃ、あなたがお困りでしょ」

「わしゃ船底で十八日すごしたんじゃ。暗闇には馴れちやりますわ」

「すいません、頂きます」

文は彼の厚意を有難く受けることにした。

「あ、それから、これ、船酔いの友だちに飲ましたらええぜよ。熱い白湯さゆに入れて」

次郎太はポケットから小壺を出した。

テキサスの梅干だということだった。